観念連合の淵源について

依　田　義　右

Ⅰ

いわゆる「観念連合」(association of ideas)という哲学的・心理学的原理は、ありとあらゆる哲学、社会科学、精神分析学等々のきわめて広範囲の諸学に用いられ、また歴史的にも非常に発展してきた原理である。この原理なしには、人類の営為の維持と発展はなかったといっても過言ではない。事実、精神と脳についての連合主義的理論の最初の体系的導入者といわれる英国の心理学者ハートリー(David Hartley 1705－57)は、彼の『人間論』(*Observations of Man*)の一節で「習慣、慣習、模範、教育、権威、党派的偏見(Partyprejudice)の力(Power)や工芸(manual arts)と自由七科(liberal arts)の学び方(the Manner of learning)等々に関して、古代人や近代人によって述べられてきた一切は、その根本において、この学説［観念連合］に基づいていて、さまざまな情況でのこの学説の細部に過ぎないとみなされうる。」(1)とまで言っている。従って、われわれが、例えば、19 世紀の英国の思想、宗教、政治、経済、芸術等々の諸問題を解明しようとして、それら領域に甚大な影響を及ぼした思想の一つである功利主義(utilitarianism)を取り上げたとしても、それを基礎付けている原理たる観念連合［連想］の理解なしには、功利主義の真の理解はありえず、また、それと関わりを有する諸問題の理解も困難になろう。

さて、観念連合は、その直接の祖ロックの哲学史的位置付けを考慮するとき、ロックによって、アリストテレス的形相－質料論から成るスペキエス認識説とデカルトの生得観念説とに反対して、まさしく、経験論的地平で語られていることは明らかである。われわれは、差当り、ロックにおいて、その意味するところを詳細に見ておくことにしよう。

Ⅱ

(1)ロックは、『人間悟性論』(*An Essay concerning Human Understanding*、1690)の第2巻「観念について」の第2章から、第11章にかけで、単純観念(simple ideas)について述べている。この観念には 4 種類ある。第 1 に、ただ一つの感覚機能(sense)によってわれわれの心(mind)にやってくる観念。五感を通じて来るものである。たとえば、視覚では、光や、白、赤、黄色、青等々の色、およびこれらの混合色としての、緑、深紅、紫、海緑色等々であり、聴覚では、あらゆる種類の音(noises)、響き、音調であり、味覚では、味、嗅覚では、香り、触覚では、熱さ、冷たさ、固さ(solidity)等々である。第 2 に、一つ以上の感覚機能によって、心に運び込まれるものである。視覚と触覚から来るもの。空間または延長(space or extension)、形状、静止および運動である。これら第 1 と第 2 は、感覚(sensation)と呼ばれる「経験」(experience)に属する。第 3 に、心が、自らの眼差しを心自身の内部に移し、第 1 や第 2 のごとき外部から受け取られ、心が有している観念、これら観念に関する心自身の活動を観察することによって新たに獲得される(これが反省 reflexion と呼ばれる経験である)別種の観念である。2 種類ある。知覚または思惟(この能力は

悟性(知性)understanding)の観念と、意志作用(volition)または意志力(willing)(この能力は意志 will)の観念である。前者の例としては、単純観念の様態(modes)たる想起、識別(disceming)、推理、判断、知識、信仰等々である。第 4 に、感覚と反省のすべての仕方で、心に思い浮かばせる(suggest)観念である。快(pleasure)、歓喜(delight)およびその反対の苦(pain)、不安、力(power)、存在(existence)、統一(unity)、継続(succession)等々である。

尚、ロックは、これら単純観念が、実際に知識を形成していく仕組みについて、「もしわれわれが、24 文字[アルファベットのこと]のさまざまな組合せによっていかに多くの語が作り出されるか」(1)を考え、そこから類推すれば分かろうといっている。

ロックは、このように、あくまで彼のいう「経験」の地平に立脚しながら、一方、心のなかの知覚、思考を語る、または、悟性の直接の対象であるところの観念を語ると同時に、他方、これら観念を産み出す物体そのものの力(power)としての物体の性質(qualities)をも語る。性質とは、例えば、スノーボールというとき、心の内に、white,cold,round の観念を産み出す物体の力(the power)である。第 1 性質(primary qualities)と第 2 性質(secondaryqualities)がある。第 1 性質(または根源的性質 original qualities)は、第 3 巻第 3 章第 16 節において、アリストテレスの質料ー形相論に依拠するスコラ学派の伝統的実体・本質観を批判しているところで、「実在的本質」(real essences)と呼ばれるものにあたる。言い換えると、物体がいかに変化しようとも「物体から引き離し得ぬもの」(inseparable from the body)のことである。これらがわれわれの心の内に産み出す(衝撃 impulse 等により)単純観念が、例えば、固体性(solidity)、延長、形状、運動または静止および数である。第 2 性質とは、「対象事物そのもののうちにあって、実は、それら事物の第 1 性質によって、つまり、それら事物の感知されえないほどの部分によって、われわれのうちに、かさ(bulk),形状、組織および運動を産み出す力に他ならない性質である。例えば、色、音、味等々」(*Essay,* 170.)に他ならない。われわれの心の内へは、われわれの感覚機能への「感知できぬほどの微粒子の作用」(the operation of insensible particles)(*Essay,* 172.)によってもたらされる。ここでは、明らかに、ロバート・ボイル(1627－91)の粒子物理学の影響が考えられる。

このように、本来、存在論的に取り扱われる自然学的世界観の領域が、認識論的地平で取り扱われており、まさしく、経験論的主張が貫かれていることは言うまでもないであろう。つまり、この、現象を説明する認識論としての、物体の第 1 性質や、第 2 性質の主張は、古代のデモクリトスから近世のピエール・ガサンディへと連綿と続いた原子論(atomism)の思想なのである。ただし、ロック自身が依拠した自然科学の中心的視座は、大筋においてまだニュートン的機械的自然観の懐にある。ただ、注意すべきことは、この性質についても、われわれは、単純観念として「性質の観念」でしか知りえないということである。

(2)さて、これら心が受動的に受け取る単純観念を、心は、素材(materials)や基礎(foundations)とし、結合し(unite)たり、併置し(set by one another)たり、分離(抽象)し(separate)たりして、複雑観念(complex ideas)を形作ることが、第 2 巻第 12 章から語られる。無数の複雑観念は、帰するところ次の 3 種類に分けられうる。第 1 に、実体に依存してのみ存在する、実体の性質たる様態(modes)、第 2 に、それ自身で自存する(subsist)異なる個別的事物たる実体(substances)、第 3 に、1 つの観念を別の観念と比較し考察することたる関係(relations)である。

様態という複雑観念には、2 種類ある。1 つは、同種の単純観念から成る単純様態(simple modes)、例えば 1 ダース、または、1 スコア(単位という単純観念の繰り返し)。いま 1 つは、異種の単純観念から成る複合様態(mixed modes)、例えば、美(観賞者に喜びを引き起こす色や形の構成から成っている)、盗み(theft)(あるものの所有のひそかなる変更)等々である。

複雑観念の第 2 の種類は、実体である。言うまでもなく、実体とは、例えば、人、馬、金、水等々である。ウスィアーの別表現たるギリシャ語のヒュポケイメノン(下に置かれたもの)は、ラテン語に翻訳されて、sub-

stratum となり、substantia となったが、言うまでもなく、これは英語の substance の語源である。これに対し、ロックは、この語を、平易な英語で、下に立つ（standing under）とか、支える（support,upholding,underpropping）とかいうべきで、このような「仮定された未知の支持物」（the supposed,but unknown, support）が、「実体一般の不明瞭で相対的な観念」（an obscure and relative idea of substance in general）（*Essay*, 392.）であるとする。スコラ哲学の実体的形相（sub- stantial form）はまさにそういうものに他ならない。彼は、あくまでも経験論的地平でもって、彼以前の人々が、感覚や反省によって心のなかに無数にある単純観念のうち、数の決まった、幾つかの観念は、「常に相伴って」（go constantly together）（*Essay*, 390.）心に現われているので、適当に、便利なように統一し、一つの名前で呼んできたがゆえに、なにか一つの根源的単純観念のごとく誤って理解するに至った、と考えているのである。

ところで、実体という複雑観念は大きく分けて、物体（body）、精神（spirit）、神（God）の 3 つに分けられ得る。さて、物体も精神も、明晰な（clear）実体観念（a notion of the substance）であるとされる。何故なら、物体は、延長、形状、固体性、運動等々の外から心にもたらされた感覚たる単純観念の基体（substratum：ロックの意味で）（何であるかは解らないがwithout knowing what it is）（*Essay*, 395.）と仮定されるし、思考、すなわち、考えること、知ること、疑うこと、および、意志、精神自身の可動性（mobility）等々は、われわれが自分たち自身のうちに実体験する（experiment）もろもろの作用の基体（何であるか知らないがwith a like ignorance of what it is）と仮定されるからである。実体の本質について知りえないということは、物体や精神が無い（non-existence）と断言（affirm, conclude）できない（明白に、確固不動の証明をもって断言できないという意味であろう）というところが拠り所である。外見的には、実体の消極的証明のように見えるが、あくまで経験的地平を基礎としているゆえである。いわく「感覚（sensation）は、固形の延長する実体が存在することを、また、反省（reflection）は思惟する実体が存在することを我々に確信させる（convince）。経験はかかる実体の実存在（existence）をわれわれに保証する（assure）。その上、延長実体が衝撃（impulse）によって物体を動かし、思惟実体が思考（thought）によって物体を動かす力を有していることをわれわれは疑いえない。経験は…両者について明晰な観念をわれわれに与える。われわれが感覚や反省から受け取るもろもろの単純観念がわれわれの思考の限界である。これを越えて心は、どんなに努力をしようと、先へと進むことはできない。心は、これら観念の本性や隠された原因を詮索しようとも、どんな発見もなしえないであろう。」[2]（*Essay*, 414－5.）と。

従って、神という実体の観念（複雑観念）といえども、感覚や反省からの単純観念によって合成されているというのがロックの偽らざるところである。デカルトの言うように生れついて精神が有しているもの（生得観念 ideae innatae）ではないと彼は考える。いわく、「われわれがわれわれ自身のうちに実体験したもの［感覚と反省による単純観念］から、実存在、持続、知識、力、快、幸福、および、その他のいくつかの、性質や力（もっていないより、もっているほうがよい）の観念を得るので、われわれが、至高の存在（the supreme Being）に、われわれができる限り最も適切な観念を、適合させようとも、われわれは、これらのどれをも、われわれの無限（infinity）についての観念で広くし、それらを組み合わせることによって、神についてのわれわれの複雑観念を作るのである。」（*Essay*, 418.）と。

複雑観念といえば、最も「複雑」なのは、実体の集合的観念（collective ideas）である。例えば、世界（world）、宇宙（universe）、軍隊（army）もそれぞれ一つの観念であり、そのうちに、人間または、兵隊、馬、金、菫、林檎等々の複雑観念が、言わば、層になって存在しているのである。

さて、重要な複雑観念は、関係（relation）である。この関係という複雑観念も感覚や反省の単純観念から成る。魂は、魂自身のうちの観念の或る一方と、他方の観念との比較（comparison）によって、関係という複雑観念を得る。関係には、因果関係、同一性と差異性、比較的関係、道徳的関係がある。例えば、因果関係は、蝋（wax）

が溶ける様子の観察からも理解され得る。いわく、「蝋とわれわれが呼ぶ実体のうちに、かってはそこになかった単純観念たる流動性が、ある温度の熱を当てることによって、常に（constantly）産み出されることが見出だされるので、われわれは、熱という単純観念を、蝋に生じた流動性との関係（in relation to）で、その原因とよび、流動性を、結果と呼ぶ。」（*Essay*, 433－4）(3)と。因果関係の類縁の関係には、創造、産出、製作、変化（alteration）等々がある。また、時間も、継続する時間のその標準となる長さに比較して、短いとか、年令なら、若いとか言うのである。また、場所（places）や距離（延長）についても、標準となる大きさに比較して、より大きいとか、言うのである。

また、同一性と差異性の関係についても、心のなかの観念のうち、われわれがそれらの以前の実存在を考察した瞬間と、現在の実存在を考察した瞬間とを比較して、全く変化が見られなければ、それらは、同一性の関係としての、複雑観念となる。同様の仕方で、人間の営為における「報酬と刑罰のあらゆる権利と正義とが基づけられる」（*Essay*, 459.）ところの人間の同一性つまり人格的同一性（personal identity）は、2つの瞬間同一である自己（self）についての意識（自覚 consciousness）に、換言すれば、意識の同一性（the identity of consciousness）（*Essay*, 460）にある。このような確信の背後には、「同じ種類の 2 つの事物が、同じ瞬間に、まさに同じ場所に、在る、または実存在することは不可能である。または、同じ一つの事物が、同じ瞬間に、異なる複数の場所に在ることは不可能である。」（*Essay*, 440.）という自然学的原理がある。従って、中世以来の、いわゆる、個体化の根源（principium individuationis）の問題も、かかるロックの考え方によって、その根源は、「ある存在者を、同種類の2つの存在者に分与不可能な（incommunicable）特別な時間と場所へと限定する実存在そのもの。」（*Essay*, 441.）と定義されることになる。

この考えに基づいて、3 つの実体、すなわち、神（God）、有限な諸知性（finite intelligences：諸霊 finite spirits）、諸物体（bodies）が見られるわけである。例えば、神の場合であれば、「始まりなく、永遠、不可変、偏在のゆえに、その同一性を疑いえない。」ということになる。感覚や反省を通じての単純観念があくまで根源であり、出発点であるという経験論的地平でもって、神も自然学的理性的原理にしたがって存在しているとする。つまり理神論（deism）的処理がなされている。しかし、このことは、決して、理神論の確立のために観念連合が採られたのではなくて、或る人が経験的地平に基準を置く観念連合の立場を採ると、必然的に理神論の学説を採らざるをえないであり、哲学、認識論の重要性、即ち、認識論に基づいて、教育観、政治観等々が決定され、確立されるという周知の事実を示しているのである。これについて、ロック自身に語らせよう。

Ⅲ

ところで、同書第2巻33章（1700年の第4版で追加された）は「観念連合について」（Of the association of ideas）と題された。（*Essay*, 527.）その第 5 節と第 6 節の冒頭を、やや冗長になるが、引用しておく。

「第5節。われわれの観念のいくつかは、それらの間で、自然的（natural）対応や結合を有している。それらの出所を明らかにし、さらに、それらをそれらの固有の本性に基づいているそういった結合や対応へと結び付けをすることは、我々の理性の役目であり、長所である。しかし、この他に、全く偶然（chance）や習慣（custom）に帰されるべき今一つの観念の結合（connexion of ideas）がある。それら自身では、同類ではないもろもろの観念は、幾たりかの人の心において結合されて、それらを分離することがきわめてむづかしいようになる。実際、それら観念は常に仲間とともにおり、そして、その一方が悟性［知性］（understanding）に立ち現われるとすぐ、その連れ（associate）が一緒に現われる。こういう仕方で結合されている観念が二つ以上であるならば、それら仲間の全体は、相互に常に不可分であるゆえ、それら自身を同時に現わす。第6節。自然に組み合っているのではない仕方でのこの強い観念の連結（combination of ideas）を、心は、自ら自身のうちに、自らの意志でもってか、または、偶然に、作るのである。そこから、人々

の間で、それぞれの性癖、教育、興味等々が異なるに応じて、きわめて異なっているということがでてくるのである。習慣は、悟性［知性］においては、思考の癖を、意志においては、決定の癖を、そして、身体においては、運動の癖を、それぞれ固定する。これらすべては、動物精気（animal spirits）の連鎖に他ならないと思われる云々。」（*Essay*, 529.）

以上のように述べたとき、ロックは、実例として、或る旋律に慣れた音楽家の知性内の旋律のもろもろの観念の動きが、一度始まると、途中彼の思考の逸れが起こっても、鍵盤上の指の動きの規則性と同様の規則性をもって進みゆくことを挙げている。さらに、「きわめて幼き頃から慣れ親しんだ習慣が、神の観念（the idea of God）に、人間の姿・形を結びつけると仮定せよ、そのとき、その心は、神性（the Deity）についてどれほど不合理な事柄を考え易いであろうか。」（*Essay*, 534.）と理神論の正しさの主張に引き込んで、次のように述べている。いわく「このような幾つかの誤った、不自然な（wrong and unnatural）観念の連結（combinations of ideas）は、哲学や宗教のさまざまな流派間の抜き差し成らぬ対立を立証しているのが見いだされるであろう云々」（*Essay*, 534.）と。これらのロックの認識論における観念の起源を説明する荒削りな表現のなかに、われわれは、観念連合の学説（心理学用語では連合主義 associationism）の淵源を見ることができる。

IV

しかし、われわれが、上記に、ロックを始めとする経験論の英国直系という理由で一例として、「功利主義」を取り上げたが、実は、取り上げた最も大きな理由は、一般に、いわゆる連合主義とそこから派生した多くの理論(1)のうちでも最も代表的なものとして、功利主義が挙げられるからである。しかし、いかにして連合主義が功利主義を派生せしめたのであろうか。

ところで、功利主義の中心的原理は、いわゆる「快（楽）－苦（痛）原理」（the pleasure－pain principle）である。これは、古代のエピクロスが自然学としての原子論に基づいて見出だした原理である。このことを功利主義の完成者であるジョン・ステュアート・ミル（J.S.Mill）自身が認めている。(2) ところで、近世においては、この原理を、デカルトの論争相手であるガサンディ（P. Gassendi, 1592－1655）が、取り入れているのであるが、しかし、言うまでもなく、この原理は、ガサンディのとりわけ原子論的感覚論の影響を受けたロック自身によって、『人間悟性論』第２巻で触れられているのである。いわく「われわれが感覚からも反省からも受け取る単純観念のなかで、快と苦とは二つともきわめて重要なものである。」（*Essay*, 302.）と。そして、これら明白な単純観念たる快と苦から、複雑観念たるその他の情念の観念が生来する。では、いかにして生来するのか。まず、快と苦の観念――「善い」（good）または「悪い」（evil）等々の「精神の異なる構成要素」（difftrent constitutions of the mind）を引き起こすもの――は、われわれの情念（passions）が依存する「蝶番」（hinges）（*Essay*, 303.）の役割を担うのである。例えば、善い、悪いの場合でも、「物事が善いとか、または、悪いとか言われるのは、快または苦との関係においてのみである。われわれは、われわれのうちに、快を引き起こし、または、増大させ易いものを、または、われわれのうちに、苦を減少させ易いものを、善いと呼び、でなければ或いは、なにか他の善（good）の所有を、または、なにか悪（evil）の欠如（absence）を、われわれに獲得させ易いか、または、保存させ易いかするものをそう呼ぶ。これに反して、われわれは、われわれのうちに、なにか苦を獲得し、または、増大させ易い、または、なにか快を減少させ易いものを、悪いと名付け、でなければ或いは、われわれになにか悪を獲得させ易い、または、われわれから、なにか善を奪い易いものを、そう名付ける。」（*Essay*, 303.）というふうに説明される。この説明と同じ仕方が、すなわち、全てが結局は快と苦という単純観念に帰着するという事実説明の仕方が、複雑観念たるその他のあらゆる情念についても行なわれている。すなわち、愛（love）、憎しみ（hatred）、欲望（desire）喜び joy）、悲しみ（sorrow）、恐怖（fear）、絶望（despair）、怒り（anger）、嫉み（envy）、恥かしさ（shame）等々の情念である。

さて、観念連合の最初の結実は、功利主義であるが、まず、ロックの言葉から予想すると、快または苦の観念の連合が、幸福と不幸に、善、悪の数量的増減に応じて、展開し、従って、功利性は、幸福、善、そして、帰するところその源たる快の観念に遡るという過程を説明することになろう。しかし、功利主義者は苦労したようで、その提唱者ベンサム自身が、幸福や快の観念と、功利性という観念の間に「十分に明白な関係（a sufficiently manifest connexion）が欠けている」(3)と嘆いている。そこでわれわれは差し当り「功利性」（utility）という言葉を最初に用いたといわれているデイヴィド・ヒューム（ロックに始まるイギリス経験論の流れの完成者である）が、観念連合とどのようにかかわるかを見なければならないであろう。

V

ヒュームは、『人間の本性についての論』の第 1 巻「悟性（知性）について（Of the understanding）」第 1 部第 1 節において、観念の起源（origin）に触れている。ということは、言い換えれば、観念連合の最も基本に関わることに触れている。言い換えれば、言うまでもなく、彼の認識論の根本を説明している。更に言い換えれば、ストア学派にその源を有する生得観念説を基本として大きな哲学体系となるように一からその基礎を築いたデカルトや、その発展としての神内観念説の体系を構築したマルブランシュ等とは、全く違って、外来観念説を基本とした哲学体系、つまり一般に経験論と呼ばれる体系を、ロックに続いて目指していることになる。

しかし、注意すべきは、この第 1 節の内容は、その表題のごとく「観念の起源について」（Of the origin of our ideas）語っているけれども、第 1 部の表題にも、第 4 節の表題にもなっているように、第 4 節で本格的に語られるべき、観念の連結（connexion）または連合（association）を、ヒュームは、予め視野に入れて語っている、換言すれば、予め理解しているとみて話を進めている、否もっときつく言えば、予め理解していないと解らない仕組みにして語っているということである。

まず、ヒュームは、デカルトやバークリーらが、「観念」（ideae,idées,ideas）とだけ呼ぶところの、人間の心（human mind）の「知覚」（perceptions）を「印象」（impressions）と「観念」（ideas）の 2 種に分けている。しかし、同じ経験的地平に、すなわち同じ意識の地平に、2 種あるということはいかなることを意味するのか。2 種ではなく 2 観念の誤りではないのか。何か 2 つの異なる意味を表示する相異なる 2 つの観念の併置に過ぎないのではないのか。もしそうでないとすれば、そこに何か性質の強さの違う 2 つを見るか、或いは、また、厚みの違う 2 つ、つまり、2 つの層を見るか、以外には考えられない。

確かに空間軸でもって俯瞰したわれわれのこの予想は大筋において正しい。事実ヒュームは、この 2 つの知覚の相違を、真っ先に示している。彼によれば、それら 2 つの知覚の相違は「それら［2 種の知覚］が、心を打ち動かし、われわれの思惟（thought）または意識に辿り着くまでに、持ち続けている力（force）と活気（liveliness）の程度（degrees）」（T. 1. ）(1)の相違に他ならないのである。しかし、この言葉を注意深く読むとき、さらには、これら 2 つの知覚、つまり、印象と観念のそれぞれについての、ヒュームの詳述を目にするとき、「辿り着く」（make their way into）ということばに明らかに、「空間軸」とともに、「時間軸」で眺めた場合への、換言すれば causation観への徹底的な厳しい態度が読み取れるのである。ここで言われる「思惟」とは、「観念」（観念も思惟thoughtsとよばれる。）ないし「観念の場」としての知性（understanding）に他ならない。いずれにせよ、のちに、ヒュームの、観念連合に関わる、独創的なcausation観に達するように促したcausationが「印象」と「観念」の間にある。では、この二つの知覚（perceptions）は各々どのようなものであろうか。

まず、印象とはなにか。次のように定義される。すなわち、「最高度の（most）力と激しさ（violence）をもって入ってくる知覚である。」と。しかも、同時に、この知覚は、魂に「最初に出現（first appearance）する」知覚であるとも定義される。

印象（impressions）は、感覚（sensation）のそれらと、

ロックでは魂の受動（passion）に当たるであろう反射再現（reflexion）のそれらとに分けられる。前者の起源は不可知である。いわく、「魂のうちに未知なる原因（unknown causes）から生じる。」（T. 7；Cf.,T. 22.）と。後者は、観念から由来する。のちに詳述するように、印象の copy が観念であるが、反射再現の印象はまた、copy されて観念となり、その観念がまた、更に、他の印象や、観念を産み出す等々となる。ここで言われる「未知なる原因」が、外界の物体的対象を指すとすれば、そこに心の領域との間に、一つの causation をヒュームは考えていることになる。これも、観念連合に関わる、ヒュームの独創的な causation 観に確信を抱かせる拠り所となるところの causation である。

いずれにせよ、ヒュームで言われるところの知覚とは、「知覚－対象」つまり、知覚されたもの、すなわち、意識の直接の対象に他ならない。これは、ロックとは異なっている。ロックでは、「知覚」は、作用、つまり、「知覚一作用」である。ロックとヒュームの間の相異は、観念連合の観点から見るとき、決して小さいものではない。ここで、ヒュームは、ロックの「知覚－作用」に当たるものを、「印象」（印象－作用）に押し込んでいる、つまり、「印象」に当たると考えている。

さて、「観念」については、いかに詳述されるか。まず、観念とは、「思考と推論における印象の弱い心像（faint images）」と定義される。もちろん知覚の一種類である。

それでは、images とはなにか。まず、思いつかれるのは、images が、印象の、観念との「類似」（resemblance）のことであるということである。同じことだが、images は、また、観念をして、印象の「描写（再現）」（representations）（T. 3.）といわれるものに当たる。これは、観念の描写的に表現する働きで以て、描写されたものである。観念は、「印象の反省（the reflexion）」といわれる。（T. 2.）しかし、これは、「反省的心像」に他ならない。或いは、観念が、印象の「模写」（copies）（T. 3.）ともいわれるが，images は、その模写のことである。いわく、「われわれのすべての観念は、われわれの印象から模写されている。（copy'd）」（T. 10.）と。

それでは、copy する心の働き（faculty）というのは何であろうか。記憶機能（the memory）と想像機能（the imagination）である。前者は、われわれが印象を繰り返す（repeat）時の機能であり、印象と、観念の中間の活き活きさ（vivacity）を有するものを産み出す。これに対して、後者は、「完全な観念」（a perfect idea）と呼ぶべき、活き活きさのないものを産み出す。まさしく、この 2 つの機能が、観念の連合を可能にするのである。しかし、これらの機能が働くといっても、自由奔放、滅多矢鱈に働くのではない。そこには、「幾分かの手順（method）や規則（regularity）」(2)が見られる。

ところで、観念が、印象の copy であるということは、次の 2 つの点に、われわれを注目させる。第 1 に、Original な「印象」とその copy にすぎない観念との間にある causation である。第 2 に、観念が、その original な「印象」に比べられるとき、実に「弱い」哀れな、信じられないほどの扱いであることに注目しなければならない。

さて、第 1 の注目点の、「印象」と「観念」との間にそもそもcausationの存在することは、あたかも、かのメーヌ・ドゥ・ビランが、努力感（sens de l'effort）たる内感の原初事実（le fait primitif du sens intime）として、「努力」（l'effort）または「力」（la force）または「超有機体的力」（la force hyperorganique）と、これへの「抵抗」（la resistance）という 2 項を示し、この 2 項に既に人間にとって根源的、原初的な因果関係を見ているのに類似している。もっとも経験的知覚認識〔外面的経験の事実〕（ヒューム）と内感的事実〔内面的経験の事実〕（ビラン）の違いがあることは言うまでもない。(3)

ところで、第 2 の注目点で、「信じられないほどの」とわれわれが言うのは、一つには、一般に、原物と比べて、その copy の方が、その存在価値において、無限に劣っていることを、われわれは知っているからである。もう一つの理由は、強烈な明晰性、明るさを有するものが印象であって観念ではないといわれるからである。これら 2 つの理由から、観念の連合が、今日まで見られるように、きわめて重要な哲学的原理として、採用され、受け継がれるようなことが、きわめて理解しがたいことのように思われる。にもかかわらず、ヒューム自身は、『人間悟性の研究』第 2 節の註において、「観念なる語は、

ロックやその他の人々によって、ふつうきわめて漠然とした意味に解されているように思われる。」(E. 22.)と述べている。

これはどういうことを意味するのか。恐らく、大きな哲学体系の、その根拠となる認識説が、それぞれの体系を支えるようになっているのは、まず、観念の起源が問題となるのであって、「決して、いつ思惟が始まるのか」(E. 22.)が問題なのではないと、ヒュームは考えているからであろう。従って、観念には、「出生」、「本性」、「起源」という 3 つの大きな問題があるが、ヒュームは、「起源」が解れば、「出生」も「本性」も自ずと明らかになると考えるので、「起源」こそが探求すべき最大の問題と考える。ヒュームは、それを「印象」とするのである。しかし、印象自体の「起源」については、既に触れたように、不可知の態度をとるのである。

ところで、ヒュームは「観念の結合の原理」(principles of connexion among ideas)、または、「観念を連合する一般的原理」(general principles, which associate ideas)(T. 93.)換言すれば、「連合が生じる元となるとともに、このようにして、心が一つの観念からもう一つの観念へと運ばれる手段ともなる性質(qualities)」(T. 11.)として、次の 3 つを挙げている。すなわち、「類似」(resemblance)、時間または空間における「隣接」(contiguity)、「原因」(cause)または「結果」(effect)である。類似は、例えば、描かれた絵を見て、元の景色へと心的機能がわれわれを導く場合である。隣接は、例えば、ある建物中の一部屋についての言及が、自ずと、他の部屋に関する詮索、または、話を誘発する場合である。原因または結果は、例えば、われわれは、傷のことを考えていながら、それに続いて起こる苦痛のことを考えないわけには行かない場合である。(Cf. , E. 24.)これらが、心の機能たる想像力によって、記憶力の助けをえてなされるのである。

そして、ヒュームは、かのアイザック・ニュートン卿が、自然界において発見、適用した「引力」(attraction)を、「精神界」(the mental world)にさえも、適用しようという傾向を示す。(Cf. , T. 13.)しかし、この傾向は、ヒュームのむしろ根本的な方針といわねばならない。彼は周知のごとく一般に人間の心のなかの諸々の形而上学的観念、例えば、能力(power)、力(force)、エネルギー(energy)、必然的結合(necessary connection)等々の観念の「不明瞭で不確実な」(obscure and uncertain)性質を除去することを目指して出発した。(E. 62)その際「われわれのすべての観念は、われわれの印象から copy される。」(T. 72. , T. 163.)という認識論的真理を「根本的原理」(fundamental principle)(T. 163)に据えた。換言すれば、印象は、きわめて明瞭であって、自ら、「強烈、無量な光」(full light)であるばかりではなく、その印象にその copy として「対応している」(correspondent)観念にも、「光を投ずる」ので、ヒュームは、上記の傾向の表現に他ならない「量と数を取り扱う学」(the sciences of quantity and number)(E. 163.)、とりわけ、彼の独創的な哲学を、いわば「新しい顕微鏡または一種の光学器械」(E. 62.)として世に問うたのである。そのうちの最大の業績が、必然的結合の観念の解明にともなう causation の独創的解釈であることは改めて言うまでもないであろう。しかし、かの「信じられないほどの」観念の弱さをどう説明すべきか。

VI

さて、ここで、ヒュームの見地、とりわけ　上述の第 2 の注目点、即ち、「信じられないほどの」観念の哀れさ、即ち、観念を印象より不明瞭なその copy とすることを、よりよく解明せんがために、ヒュームより 73 年前の、フランスの哲学者マルブランシュとヒュームとを簡単に比較しておきたい。

以上のごとく、ヒュームの観念は、印象の copy に過ぎない、きつく言えば、影に過ぎない。「信じられぬほど」哀れなものである。マルブランシュが述べたイデ(idées 観念)とは、全く異なる、正確に言えば、正反対である。マルブランシュのイデ(観念)は、神の精神の内にあり、それ故に、最高度に光り輝き、最高度に明晰である。ヒュームにとって、最高度に光り輝き、最高度に明晰なのは、印象である。マルブランシュにとって、認識対象とは、取りも直さず、神のうちなるイデ(従っ

てまた、神そのもの）であったが、ヒュームにおいては、上記に少し触れたように、それ自体としては不可知な物質的対象（objet）である。

いま、魂という実体をとり挙げて、少し、詳述すれば、マルブランシュにおいては、われわれは、われわれの魂を、内面の感覚（sentiments intérieurs）でしか捉えられない。神のうちに、正確に言えば、神の御言（le Verbe）のうちに、魂のイデはあるのだが、われわれには認識できない。ただ、内面の感覚によって知られる、換言すれば、感じられるのみである。或いは、信仰において、すなわち、無から人間（の魂）が神に似せて創造されたことを告げる聖書において確認し得るのみである。

ところで、神のうちのイデが、われわれの魂（âme）を触発し（affecter）、従って、魂を変様する（modifier）。マルブランシュが、idées を広義に定義するとき、これら変様すなわち感覚（sentiments）をも含めるのは、客観的には、イデは、狭義に、神の内にあっても、まさしく、主観的には、見えている通りのもの、すなわち、われわれの側のもの、すなわち、魂の変様たる感覚であるからである。経験的地平だけで、つまり、視覚に限れば「見え」だけでなら、ヒュームとマルブランシュとは区別が付かないであろう。

一方、ヒュームでは、経験的地平にのみ真理基準を置く仕方は、ロックより徹底している。ヒュームにとっては、一般に実体（substance）といわれる魂・心（mind）は、「さまざまな知覚の積み重ね（heap）または、集まり（collection）に過ぎない。」（T. 207）われわれは、これをただ誤って、いくつかの関係によって一緒にして考え、何か完全な単純性と同一性が付与されているなどと推測するのであるとされる。

しかし、同じようなことは、一般に実体と言われる心についてのみ言われうるだけでなく、一般に実体といわれる延長についても言われ得る。いわく、「私の眼前のテーブル…しかし、私の感覚機能は私に、或る一定の仕方で配置された、色の付いた点の印象のみを伝える。…延長の観念とは、これら色の付いた点や現われ方の copy に他ならない。」（T. 34. ）と。

実体観念一般についてまとめて言えば、いわく、「実体の観念は、単純観念の集まりに過ぎない。」（T. 16. ）と。その際、想像力（the imagination）こそが、単純観念を結合し（unite）、集まらせるのである。そして、単純観念のこの集まりたる複雑観念に、われわれが、「実体」という「特殊な名前」（a particular name）を割り当てて、われわれ自身や他人とのコミュニケーションのために用いているに過ぎない。

もっとも、ヒュームのこの考え方は、ロックのそれと一見するところ大差ないように見える。しかし、そうではない。というのも、ヒュームが、上に触れたように、「実体」なるものの存在に懐疑的であるのに対して、ロックは、懐疑的ではない。ロックいわく、「感覚（sensation）は、充実体的な延長実体(solid extended substances)が存在することを、われわれに納得させ、反省（reflection）は、思惟実体が存在することを、われわれに納得させる。つまり、経験は、そういう存在者（beings）が実存在すること（the existence）をわれわれに確信させる。…」（*Essay,* 414）と。

さて、マルブランシュでは、「延長の観念（i' idée de i' étendue）」は、われわれの感覚知覚において、なんらかの例えば色が付いて見える。しかし、神の内の延長の観念そのものが色付いているなどということはなくて、われわれの魂の側の、つまり、延長の観念の触発によって魂が変様して、例えば、茶色の感覚で、個的延長体、例えば、机が見えてくるのである。個別化の根源が色であるといわれるのはそうした意味でである。

外見上、ヒュームに類似する。既に触れたように、「見え」だけでは区別はつきにくいであろう。これは、度々触れた、ヒュームの観念の哀れな在り方の謎解きにもつながろう。しかし、両者は全く異なる。例えば机の色の背後に、ヒュームは、それ自体不可知な物体自体を置くのに対して、マルブランシュにおいては他のどんな事物が存在しなくてもそれ自体ですら単独に存在する存在者すなわち神を置く。両者の根本的相違を、causation に関して言うならば、マルブランシュは、神の内なるイデ（idées）と、われわれの魂の変様（modifications）たるもろもろの感覚（sentiments）との間に causation を見ている。しかし、それは、ヒュームのごとき「認識論的

に」解された causation ではなく、「存在論的に」解されたそれに他ならない。真原因、創造主、作用者としての神と、その結果（機会因とはなりうる）たる、被造物であり絶えず受動的な魂及びその変様との間の causation である。しかし、経験的地平といういわば影絵のスクリーン上では、両者は一時的に、いわば利益を共有し同席する。

この一つの光源による影絵のスクリーンの喩えこそヒュームの観念の信じられないほどの哀れさの謎を解く鍵となる。影絵の背後で操られる眩く光る人形そのもの（スクリーンの背後に回れば、人形自体は、1 つの光源によって照らされている反射光ではあるが眩く光り輝いている。もっとも人形自体は眩いがゆえに、不可知的である。）が、印象に喩えられ得る。さて、この比喩でいくと、影（絵）は、観念である。あたかも、人形そのものは、表面の性質によって、眩かったり、やや眩かったり一様ではないが、その影（絵）は、スクリーン上では、影という一様な性質を保っているごとくである。観念はこのように不動、平静な仕方で以て、われわれに真実を告げうるというのがヒュームの観念説の特色であるとわれわれは考えたい。つまり、いわば、影絵のスクリーン上の均質性が、影（絵）を量的に処理しやすくする、換言すれば、ヒュームの主張する「量と数を取り扱う学」の対象に相応しくなるのである。それ故、causationの問題に絞れば、必然的に見える2つの対象事物（objects）間の結合は、原因やその結果と呼ばれる 2 観念間の、「観念間連合の異なる原理」（a true principle among ideas）（T. 93. ）たる恒常的連結（the constant conjunction）の経験或いは習慣（custom）（T. 97. ）が、想像力に自然に 2 観念を結合するように促すことに過ぎないのである。(1) そして、或るものが原因で、或るものがその結果であると、強く信じる意見または信念（opinion or belief）は、「目下の印象［当の観念の原物たる強烈に光り輝き明瞭な現在の印象］と関わりまたは連合した活き活きした観念」（T. 96）として産み出されたものと見做されてよいほどのものである。例えば影絵のスクリーン上にうつる 2 つの球体の影のうち一方の影が他方の影に衝突し、他方の影が移動することを繰り返し見せられることを思い浮かべるとき、実際このようなヒュームの見解はきわめて理解しやすいであろう。このようにして見てくると、観念連合の完成された意味での淵源は、ヒュームであり、もっと厳密に言えば、ヒュームの「知覚＝印象＋観念」説ということができるであろう。

VII

確かに、記述せるごとく、いわゆる観念連合の時代的先駆者は、ロックであり、もし、ロックが現われていなかったならば、ヒュームの存在はありえない。その意味では、観念連合の淵源はロックであり、また、その学説である。ましてや、「観念連合」なる用語で以て、自説を説いていることが何よりもそれを証明しているであろう。

しかし、公平に見て、ロックには、理論的整合性と、論の徹底的な掘り下げが不足していたことは、否めないであろう。そういう意味では、ヒュームの徹底的論究は評価に値する。否、ヒュームが causation の解明に心血を注いだのも、彼の根源的原理たる「印象」と「観念」との間にそもそも causation の存在することを知っていたからに他ならない。あらゆる心的現象・心的過程がそこに基づくことを知っていたからに他ならない。そういう意味では、上記の観念の均質性の確保とともに、ヒュームこそが、そして、彼の思想史的業績こそが、観念連合の完成された意味での淵源といっても差し支えないであろう。

しかし、ヒュームの観念連合のロック以上の深化は、あたかも、アリストテレスによるプラトン思想に対する批判的な正反対の深化も、かえって、「形相そのもの」や、「質料そのもの」の不可解性等々のような新たな問題を産み、存在の解明を先送りしたように、懐疑論（ヒュームの懐疑論自体は穏やかなものであったとはいえ）を膨らませることになった等々の難点の再生産、先送りでもあったであろう。こういった点の研究はまた別の機会に譲りたいと思う。

註

Ⅰ (1) David Hartley, *Observations on man, his frame, his duty, and his expectaions*, THOMAS TEGG AND SON (London, 1834), pp. 41－2.

Ⅱ (1) *An Essay concerning Human Understanding*, Dover Publications,INC,Bk.I. pp. 164－5. 以降、Bk.I のみとし、Essay とのみ記す。

(2) ハミルトン、スペンサー的な不可知論（agnosticism）の元は経験論者ロックにある。

(3) 原因や結果は、単純観念のこともあるし、複雑観念のこともある。

Ⅳ (1) R.M. ヤングは、『観念連合』と題された小論文で、連合主義の影響の大きさを　歴史的に通覧している。ロックに始まる観念連合の影響下に派生した思想として、代表的な思想を 3 つあげている。それらは、功利主義、機能主義(functionalism)、精神分析(psychoanalysis)である。その影響たるや、Wundt, Freud は言うに及ばず、20 世紀初頭から現在に至るまでをざっと見ただけでも、刺激－反応理論、続計的理論、サイバネティクス理論、学習理論、洗脳機械、教育機械、精神分析の被験者の自由連想等々とあるが、いずれも「観念連合の伝統の非常に多様な表現」でしかないとされる。尚、ヤング自身は、功利主義と観念連合とがいかに関わるかという、この誰もが抱く一大関心事について、この論文は、その歴史的概説という性格上、全く触れていない。Cf. , Dictionary of the history of the ideas p. 111－17.

(2) John Stuart Mill, *Utilitarianism, Liberty, and Representative Govemment*, Everyman's Library NO.482,pp.5－7.

(3) Jeremy Bentham, *An Introduction to the Principles of Morals and Legislation*, Oxford at the Clarendon Press, p.18.

Ⅴ (1) A Treatise of Human Nature, Oxford at the Clarendon Press, p.1. 以降ヒュームの主著 Treatise を、T. と略す。
尚、この辺りの事情については、ヒューム自身が述べている。ibid. , P. 2. のヒューム自身の註記みよ。

(2) An Enquiry concerning Human Understanding, Oxford at the Clarendn Press p. 23. 以降この書は E. とのみ略す。

(3) Oeuvres philosophiques de Maine de Biran, Publiées par V. Cousin, Tome deuxième, pp. 278－79.

Ⅵ (1) 拙論『マルブランシュの因果説のヒュームへの影響について』（「芸術 19」大阪芸術大学紀要）を参照されたし。